

母語としてのデンマーク語教育における文学カノン  
—フォルケスコーレの教科書にみる伝統と革新—

デンマーク語専攻 久木田奈穂

目次

1. はじめに
2. 研究の背景
  - 2.1. デンマークの文学カノン
    - 2.1.1. 北欧3国と文学カノン
    - 2.1.2. デンマーク文学カノン
  - 2.2. フォルケスコーレにおける母語としてのデンマーク語
    - 2.2.1. デンマークの教育システムとフォルケスコーレ
    - 2.2.2. 母語としてのデンマーク語という科目
    - 2.2.3. フォルケスコーレにおける教科書システム
  - 2.3. デンマーク語教材に関する先行研究
    - 2.3.1. デンマーク語教科書の構造の変化
    - 2.3.2. カノン作家を教材として扱う際の注意点
3. 本研究の目的
4. 研究方法
  - 4.1. 本論文の分析方法
  - 4.2. 教科書・*Fandango* シリーズ
5. 教科書・*Fandango* シリーズの定量的分析
  - 5.1. テキストの言語と地域, 年代, ジャンル
  - 5.2. 文学カノンリストとの比較
6. 教科書・*Fandango* シリーズの定性的分析
  - 6.1. “Klods-Hans” の概要
  - 6.2. 導入や設問に用いられるアンデルセン
  - 6.3. アンデルセンテキストと間テキスト性
    - 6.3.1. アンデルセンテキストの古典的読解
    - 6.3.2. アンデルセンテキストのパロディラップ
    - 6.3.3. その他のパロディテキスト
7. 考察
  - 7.1. 補足事項

## 7.2. 定量的・定性的分析からの考察

### 8. 現代デンマークの国語教育に関する筆者からの一考察

### 9. おわりに

使用テキスト

参考文献

参考辞書・辞典

インターネット上の資料

資料

## 要約

現代においては、グローバル化に伴い資本や労働力などの国境を越えたあらゆる移動がこれまでにないほど活発化し、「何を・どのように教えるべきか」という問いが国・地域を問わず注目を集めている。特に、文学の分野においては模範的な作家や文学作品群をさす「文学カノン」が存在し、長きにわたって議論の対象となっている。また、デンマークでは、他の北欧諸国とは異なり、学習義務が生じるデンマーク文学カノンが指定されている。このように、効力をもつ文学カノンが存在しているデンマークであるが、教育現場での文学カノンの取り扱いの実情はどのようなものなのであろうか。換言すれば、古典作家を中心とする文学カノン作家たちは、今なお現代デンマーク語教育の場において読まれているのであろうか。

そこで本論文では、教育における文学カノンの歴史や背景、役割をふまえたうえで、初等・中等段階を対象とする公教育機関であるフォルケスコレで使用されるデンマーク語教科書シリーズ・*Fandango* (1～9年生) に対し、定量的・定性的手法の混合アプローチで調査を試みた。その際に定めた3点のリサーチクエスションは、以下のものである。

- ① 文学カノンの観点において、*Fandango* のテキスト選択をどのように特徴づけることができるか
- ② *Fandango* の具体的教材において、文学カノンはどのように扱われているのか
- ③ 文学カノンの観点における教科書分析に基づく、現代デンマーク語教育の特徴は何か

2章では、本論文の研究背景として、デンマーク文学カノンやフォルケスコレ、教科としての母語（デンマーク語）、さらにその教科書の概要や先行研究を順に概観した。そして、デンマークとスカンジナビア諸国の文学カノンに対する姿勢の違いや、デンマーク文学カノンに寄せられる多様な関心や研究テーマを紹介した。

続く3章では、本論文のリサーチクエスションを3点に整理し、4章ではデンマーク語教科書シリーズ・*Fandango* を分析する2つの手法についてまとめた。なお、本研究が1つの教科書シリーズを包括して分析する観点は、教科書に掲載するテキストの選定という点と、教科書を用いて教える際の教授法の2点に大別される。

5章では、*Fandango* シリーズの1～9年生用の教科書について、巻末テキストリストを参照して統計的に分析を行った。その結果、文学カノンに固執せず海外作家や現代作家の作品を積極的に採用し、いわゆる文学テキストに限らず音楽や映画、SNSなどのあらゆるジャンルを取り扱う、同シリーズの挑戦的な姿勢がみられた。

6章では、アンデルセンの *Klods-Hans* という作品に関連する具体的な教材を取りあげ、教科書を用いて教える際の教授法の分析を目的として質的な調査を行った。すると、カノン性が伝統的で固定化された読みにも効果的な学習効果にも繋がらうという、文学カノンの両義性が明らかとなった。

最後に、7章以降を本論文の考察やまとめとした。7章では本論文の研究では扱いきれないいくつかの限界点を明らかにしたうえで、定量的・定性的分析を総合した考察を行った。8章において、これまでの調査結果をふまえたデンマーク語教育に関する筆者からの一考察を展開したのち、残る9章を本論文全体のまとめとした。グローバル化が進み、移民の増加による影響が積極的に議論される現代デンマークでは、カノンは避けて通れない重要議題であり、その正統性が一体だれのもので、どうやって形作られてきて、何を生んでいるのかを問い直す時が来ているといえる。母語としてのデンマーク語教育に関して、教科書に掲載される教材の選定、そして文学作品を教材とする教授法のどちらにおいても、文学カノンは密に関係しており、伝統と革新の狭間で変化を続ける実情が垣間見えた。より良い国語教育の実現には、文学カノン作家を扱うことの利点と欠点を吟味した上で、時代に即した形を絶えず模索していく必要がある。

今後、異なる出版社や教育段階のデンマーク語教科書シリーズと比較することや、実際の教室や博物館、劇場などで行われる文学教育実践の調査などを通して、現代デンマークの教育における文学の規範化と新たな試みにまつわる研究をさらに深めていくこととしたい。